信長の野望
覇王の海上要塞

東郷隆

歴史 NOV

KOE

江苏工业学院图书馆
藏书章

著者紹介

東郷 隆■とうごう りゅう

1951年、横浜生まれ。国学院大学経済学部卒業。同大学博物館学研究助手、編集者を経て、1980年アフガニスタン内戦を体験。ノンフィクション『戦場は僕らのオモチャ箱』を出版後、作家活動に入る。戦記小説を刊行するかたわら、各誌に歴史小説を執筆。近著『人造記』（東京書籍）は、活字の氾濫する昨今では珍しく良質な歴史奇談小説に仕上がっている。

信長の野望
覇王の海上要塞

発行日
初版1991年1月30日

著者
東郷 隆

発行者
襟川 陽一

発行所
株式会社光栄
〒223 横浜市港北区日吉本町1-4-24
☎(045)561-6861

印刷製本
図書印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えします。

© R. TŌGŌ 1991 PRINTED IN JAPAN

ISBN4-906300-25-1 C0093

目次

一、安土炎上のこと……7
二、信長伊勢に逃れること……57
三、フランチェスコ鍛冶職となること……105
四、九鬼嘉隆かたぱるとを得ること……141

五、五ヶ所城の水軍全滅すること……169
六、鉄船出陣のこと……201
七、瀬戸内合戦のこと……221
後記……253

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

信長の野望

覇王の海上要塞

以下は、不識院大僧都上杉謙信と〝覇王〟織田信長の戦闘を実際に体験した、一外国人の不完全な記録である。

正確に言うならば、一五七八年八月半ばから翌々年の一五八〇年七月まで、を記録している。

賢明な読者諸兄を前にして、この時代の日本における政治状況を述べることは、蛇足のそしりをまぬがれぬが、一応書きそえておこう。

天正六年三月九日午の刻、居城春日山奥屋敷の厠で、織田信長の放った刺客により傷つけられた関東管領上杉謙信は、その後数カ月間、越後三島郡与板の直江家に身を隠し、同年六月突如兵を挙げて関東に乱入した。すでにこの段階で彼は佐竹・里見の反北条勢力と同盟を結んでおり、武田勝頼を抱きこみつつあった。謙信の生存に疑問を感じていた北条氏政は、愚かにも小田原を出て武州河越に出陣、包囲されて降伏した。管領職として名実ともに東国支配を確立した謙信は、小田原を焼きはらうと、関八州の兵を集めて北陸にとって返し、加賀へ前進した織田信長の軍を破る。織田家の重臣柴田勝家・佐々成政・神保長住・佐久間信盛父子は越前三国で敗死し、これが全国の反織田勢力を力づけた。七月一日、播州で羽柴秀吉・丹羽長秀があいついで戦死、二十一日、松永久秀以下大和の諸将が信長に背く。

信長は四面楚歌の中、からくも伊勢に脱出し、堺を味方につけて再起を図った。

記録者は外国人の立場にありながら信長の参謀として彼の身近く侍り、信長の瀬戸内進出に同行した一イタリア人である。

記録は、大部分がイタリア語の日記体であるため、本書ではその多くを三人称の小説体に書きあらためているが、読者諸兄にはそのつもりでお読みいただきたい。

一、安土炎上のこと

1

鐘の音が、フランチェスコの鼓膜を打ちつづけていた。
たわわに実った大麦畑の間に屹立する灰色の城塞都市。そのかなたからまるで地鳴りのように鐘の音は鳴りつづけていた。
漆喰で固められた城壁の前面には雑草だらけの空堀があり、麦畑から城門前の広場に続く太い道の両わきは、新たに突きかためた土のテラスがゆるやかなカーブを描いている。
空はあくまでも澄みわたり、アルプス・トレンチノの山脈がその青と半ば溶けあうようにして、稜堡の向こうに見え隠れしていた。
（トレヴィーゾ、おおトレヴィーゾだ！）
フランチェスコは呻いた。
見間違えるはずはなかった。城門の正面右側に開いた大きな穴は、彼の祖父がまだこの町の傭兵隊長だったころに起こった戦いの結果。ヴェネツィア共和国の番犬であるバヴァリアやチロル出身の、勇敢にして狡猾なあのカルヴァリン砲射手たちによって穿たれたものであった。
（穴がある。懐かしい穴が）
フランチェスコはほこりだらけの道を駆け、土手をよじ昇ってそこに手をかけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

トレヴィーゾの市民評議員たちが、傲慢（ごうまん）なカンブレー同盟の圧力をはねのけた記念として〝穴〟は一五一一年から約五十年間そのままの姿で残された後、教皇ピウス四世の竹馬の友を鼻にかける評議員マッシモ・デ・サンガッロの手によって、唐突にふさがれた。それまで穴を遊び場としてきたトレヴィーゾ城内居住者の子弟たちは、大人の身勝手さに大声で反対を唱えたが、その後彼らに待っていたものは、日曜日の子供礼拝の後に行なわれた司祭による笞（むち）の洗礼だった。

以来、十五年たつ。

（そうだ、この穴は近道なのだ。このまま潜りこんで仮設の土塁（レティラータ）まではって行けば、祖父の住む館にたどり着ける）

フランチェスコは、穴に身を乗りいれた。漆喰の穴は、直径が二ピェーデ（六十センチ）ほどの小さなものだが、不思議なことに大人のフランチェスコでも楽々と潜りこめた。

やみの中でも鐘は鳴りつづけている。

（あれは、館の裏にあるサンタ・マリア・デ・ヴィアンコ教会の鐘だろうか）

手さぐりで穴の中を進むうち、急に穴の側壁が振れはじめた。

（地震だ）

地震など起こるわけがない。アルプス造山運動が作りだした古い岩石地帯の上に建つトレヴィーゾが、ナポリのように振れるわけがない。フランチェスコは思った。

（外敵！　またカンブレーの悪党どもが攻めよせて来たに違いない。これは砲撃の振動だろう）

一刻も早く祖父の館へたどり着かねばならない。床にひじをついた彼は、腹ばいになって前進

した。
穴の内部はますます振れがひどくなる。
（あっ!?）
フランチェスコは急に思いあたり、振れる側壁にわき腹を押しつけた。
（祖父は私が十一の年に死んでいるのではないか……）
それだけではない。サンタ・マリア・デ・ヴィアンコの礼拝堂も一族の館も、彼がその町を旅立つ直前、サンガッロによる城壁拡張計画の犠牲となって取りこわされている。
（この穴はもう存在しないものなのだ。教会も、館も、わが家族さえも……。すると私はなぜここにいるのだ？　なぜ）
壁がひときわ大きく振れ、フランチェスコは思わず目を閉じた。

「お目覚めを！　ふらんちえすこ殿」
異国の言葉に、彼は目を覚ました。やみの中に一条の光が輝き、
「目を覚ましてくだされ。ふらんちえすこ殿」
「だれだ？　ジャンヌか？」
フィレンツェ訛りで昔馴染んだフランス女の名を叫んだところを見ると、彼はこの時、いまだ夢と現実の境を彷徨いつづけていたに違いない。
異国人は、彼の寝ている粗末な木のベッドを力まかせに揺さぶっていた。
「一大事じゃ、棟梁。お知らせがござるぞ」

もう一人の東洋人が、マジャール人そっくりなイントネーションで、フランチェスコの手を引いた。
この時になって、初めて彼は木製の枕から自分の後頭部を持ちあげた。腹の上にかけた薄布が、汗で濡れそぼっている。室内は、彼自身の体臭と、二人の異国人が発する魚醤じみた臭いで息もつまりそうだった。
「何事だ？　尾州、源太」
フランチェスコは、裸の上半身を起こし、寝汗で光る亜麻色の髪の毛を掻きむしった。
「聞こえませぬか？　あれが」
鐘があちこちで鳴りひびいていた。
洋鐘もあれば、外側を木の棒でたたく東洋鐘の音も聞こえてくる。
（夢の中で聞こえた鐘の音は、これか……）
手作りの寝台に座りなおし、フランチェスコは両眼をこすった。額の中央が痺れるようだ。
「今の定時課（僧院などで使用する時刻の単位）は？」
「讃課（午前四時半ごろ）でござる」
厨房係の尾州が、枕もとの燭台に手燭の火を近づけつつ答えた。
キャンドルの芯に火が移ると、室内はますます明るさを増す。傍らのテーブルに散らばる羊皮紙の巻物や和紙の束が、木目も鮮やかな板戸に、凶々しい影を作った。
「寝床に着いたのは深夜課（午前三時ごろ）だ。もっと寝かしておいてくれぬかの」
「なにを悠長なことを」

下働きの源太が半袴のすそをひるがえして窓際に走りより、鎧戸に手をかけた。
「御覧ください！」
フランチェスコは、ポカンと口を開けた。
大きく開放された鎧戸の向こうに、火の海が広がっていた。
「町が、宮殿（パラツツィオ）が……」
彼は寝台から腰を上げ、フラフラと窓際まで歩みよった。
信じられない光景が広がっていた。
「燃えている……安土の城下が。大殿（シニョーレ）のカステル・デル・ソル（光の城）が……」
むき出しになった彼の青白い肩に、尾州が慌てて自分の袖無し（羽織）を着せかけた。そうせねばならぬほど多量の火の粉が宙空に舞いあがり、部屋の中まで侵入してくるのである。
「どういうことだ、尾州？」
「松永弾正の裏切りでござあるわい」
尾張生まれの老調理人は、吐きすてるように言った。その時になってフランチェスコは、やせこけたこの田舎老人が、胴の前に朱の十字を描きこんだ古具足で、身を包んでいることを知った。
「マツナガ……？　マツナガというと、オサカ（大坂）の坊主（ボンズ）攻めでテンノージジョーバン（天王寺砦定番（じょうばん））を命じられているヤマト（大和）のアクトー（悪党）老人か？」
「左様でござる」
「わかった」
「わが衣裳と剣（レピア）を持て」

と源太に命じフランチェスコは窓際から離れたが、
「待て、源太」
椅子へかかった隠し短剣のベルトを背に着装しようとして、ふと考えを変えた。
「いや、唐櫃部屋へ行き、小袖と大小を持ってまいれ。なるべく目立たぬ色合いの物を選ぶのだぞ」
「かしこまって候」
源太が転がるようにして部屋を飛びだしていくと、彼は尾州に手伝わせて自分の荷物箱に巻物や本を詰めこんだ。
やがて源太が、神学校の在学生数人を伴ない、戻ってきた。
「別棟の装束部屋は、すでに火がまわり始めてございます。じゃによって唐櫃ごと運びまいた」
浅葱色のお仕着せを着た見習い修道士たちが、櫃のふたを外し、フランチェスコに合いそうな丈の小袖を着せかけ、かるさん（脚絆つきの細袴）を穿かせた。
「パードレたちは、いずれにおられる？」
小型銃をキモノの懐にねじ込みながら、フランチェスコは左右に尋ねた。
「僧房の屋根に火の粉がえらくかかるゆえ、宿坊の井戸際に退かれておりまする」
まだ口元にあどけなさの残る坊主頭の少年が、早口で説明した。
「あいわかった。そなたたちは手分けをしてここの荷物をすべて運びだすように。わしは、僧房へ行ってみる」
「おやめなされ。外は火の雨じゃ」

源太が彼の袖をつかんだが、フランチェスコは荒々しくその手を振りはらった。
「写字室には、わしの描いた設計図が残っている。安土聖堂の大事な間取り図が、梁材の強度計算表が……」
イタリア人は流暢な日本語でどなると、袖口で頭を覆い、長い廊下を走りだした。

外に出ると、なるほど火の粉や灰が豪雨のごとく降りそそいでくる。
慈悲屋、と安土の民が呼ぶ施療施設から女子供のものと思われるかん高い悲鳴が、絶え間なく続いていた。生け垣ひとつ越えた隣は、北が御馬廻り衆魚住三五郎の、南が弓衆組頭美和甚六の屋敷地だが、今はその門前にも白煙が立ちこめ、長柄を手にした郎党や手桶を抱えた雑人ばらが、ただ意味もなく駆けまわっていた。
ひときわ大きな鐘の音が、安土山の中腹で打ちならされていた。これは建設途中の摠見寺に付属する鐘つき堂のそれであろう。
二つの内堀外側に軒を並べる氏家、稲葉、惟住など有力家臣の留守屋敷はいまだ健在だが、百々橋を渡った西門口の上、ちょうど摠見寺とシニョーレの嫡男信忠の邸宅が連なっているあたりでは、新たな火柱がやみを切りさいていた。
（火薬の火だ）
火術のプロであるフランチェスコは、つぶやいた。
だいたい、この大邑の中に点在する重要拠点ばかりが、時を同じくしていっせいに燃える、というのが腑に落ちない。安土山の山頂から降る火の粉だけでは、このような大火災に発展するわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com